

今から約1万2千年前から約2千3百年前までを縄文時代と言います。縄文時代の始めのころはまだ寒く、人々は小さな集団で食べ物を求めて移動しながら生活をしていましたが、気候が暖かくなると食べ物が入りやすくなり、さまざまな規模の村を作って生活するようになっていきました。たいていの村は日当たりと見晴らしが良く、川などの水場がすぐ近くにある場所に作られました。

縄文人の暮らし①〜家〜



平成18年の体験学習でたてた竪穴式住居です

りますが、だいたい六畳一間くらいの大きさが一般的で、4〜5人くらいで暮らしていたようです。竪穴式住居は、地面を30センチから1メートルほど掘り下げ、よく踏み固めて床面を平らにした半地下式の住居で、保温性にすぐれていました。

家の支柱は、床面に掘った穴に直接埋め込んで立て（掘立柱）、支柱にけたをのせ縄で結び付けます。次に木を竪穴の外側に斜めにわたし、けたに立てかけて縄で固定させ、その木に横木を渡して縄で結びます。最後にかやなどの草で屋根をふき、棟を押さえて家が完成します。

住居を作るときに出た土は竪穴の周りに低い土手のように盛り固めますが、これは雨風が家の中に入り込むを防ぐ役目をしています。今も昔も家を作る大変さは変わっていませんね。

こみゅにTeaたいむ

22杯目

がんばってます！まちづくり

3月8日（日）二戸地区合同庁舎において「第8回カシオペア連邦地域づくり助成事業最終報告会」が行われました。これは二戸地域を中心に活動する特定非営利活動法人（NPO法人）「カシオペア連邦地域づくりサポーターズ」の主催によるもので、20年度に助成を受けた二戸地域の地域づくり団体（全11団体）が1年間の活動内容を報告しました。

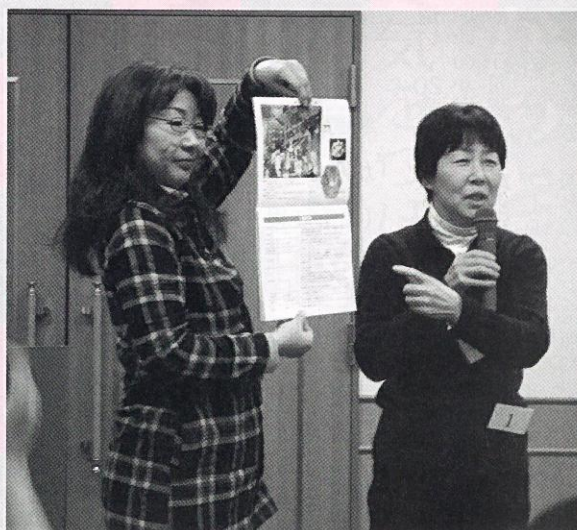
助成額は1団体あたり8万円〜20万円で、二戸市からは「よりやんせ金田一」「三浦哲郎文学を読む会」「ドレミ隊」「ほたる灯りを楽しむ会」「カシオペア探検隊」の5団体が発表を行いました。

どの団体もそれぞれの地域でユニークな地域づくり活動を展開し、龍谷大学教授の脇田健一氏をはじめとする4人の審査委員からもおおむね高い評価を得ていました。

最長3年間の助成を受け、このたび卒業し新たなステップを踏み出した団体は今回5団体ありました。これまでこの事業で助成を受け、ステップアップした

団体は「門崎むらづくり協議会」「ぎばって足沢・70の会」「岩誦坊クラブ」など数多くあり、今後の活躍が大いに期待されます。

この事業は21年度も継続され、5月には助成団体を決定する審査会が開催される予定です。我こそはこの団体はぜひチャレンジしてみてください。



「よりやんせ金田一」の発表の様子

この欄の問い合わせは、市地域づくり推進課（内線 655）まで